

『元朝秘史』十五卷本鈔本について

— 陸心源舊藏本の検討 —

原 山 煌

はじめに

- 一 十五卷本鈔本、とくにソ聯本について
- 二 陸氏本の検討、およびソ聯本との対照
- 三 陸氏本とソ聯本の異同について

はじめに

今日のが國のモンゴル學の基礎が、一九〇七（明治四〇）年に公刊された那珂通世の『成吉思汗實錄』（大日本圖書株式會社、同年一月一八日發行）によって築かれたとは、諸家の等しく認めるところである。それは、該書が『元朝秘史』（以下『秘史』と略稱）の、言葉の眞の意味における譯注としては、世界最初のものであったということだけによるものではない。膨大な漢籍史料の蓄積による知見を、この新たに人々の前に現われた史料に譯注の形で照射することによって、如何に巨大な未踏の境地がモンゴル學に存在するのかを、直接明示し問いかけたという點にこそ大きな意味があるのだ。後學の研究上の關心が強く刺戟され、大きく掻き立てられたのである。『成吉思汗實錄』が、刊行當時すでに大きな反響を以て江湖に迎えられたであろうことは、その書が初版において二つのヴァリアントをもっていたばかりか、初版印行に時日を接して再版が發行されていた事實⁽¹⁾によっても窺えるだろう。

爾後いくつもの譯注書が、外國に於いても國內でも發表されたが、研究史上那珂の業績を明らかに凌駕するものは、残念ながら見出し難いと言わざるをえない。この状況については、私は曾て指摘したことがあるので、再言は避けるが、實は七十數年も前に公刊された譯注が、多くの後續の類書があるにも拘わらず、いまだに第一に参照すべきものであり續けている。そこにこそ大きな問題が含まれているように思われる、ということだけは此處に改めて指摘しておきたい。

那珂以降の『秘史』研究について見れば、量的には多大の研究がなされているし、質的にも多岐な學問分野からの關心が注がれているといえる。⁽³⁾しかし、質量ともに充實しているかに見える『秘史』研究には、等閑にふされている部面、さらにはなんとなく既に解決済みというつもりになってしまっている問題も少なからず残されているようだ。考えてみれば、これは當然のことかもしれない。資料⁽⁴⁾としての『秘史』の内容の多彩さが、各分野の研究者たちに、己の興味に向くままに夫々の抱くトピックをまちまちに深く掘り下げるといふ營爲をいそがせたのである。すなわち『秘史』研究のありようは、體系的組織的であるというよりは、個別的局地戰的であつたといえる。従つて、思ひのほか基本的なテーマのいくつかが、たまたま研究上の關心をひかなかつたということのため、未考察のまま放置されるに至つた。これが恐らく『秘史』研究の偏頗性の最もわかりやすい説明となりうるだろう。

『秘史』の文獻學的研究も、いくつかの基本的な研究があるものの、未分明の部分もまた多く存在する。『秘史』のエディクションがどのように流傳したのかというテーマも、那珂の詳細な説明、洪業の該博な研究⁽⁴⁾、そして最も新しいままとつた『秘史』研究ともいべきクリーブスによる翻譯の「序文」に要約された事以外の詳細は、あまり明らかになつていないといえる。『秘史』のそもそもの成立の年時・事情などの問題にしても、諸説紛々の觀を呈するが、中には根據實證を缺いた鬼面人を驚かす態の臆斷もないではないようだ。曾て那珂や洪業が行なつた、緻密な考證にもとづく地味ではあるが搖ぎない鐵案ともいべき諸説を見るにつけても、先學の成果をたとえ少しずつでも確かな足どりで補強して行く努力を積み重ねなければならぬと思われるのである。さもないと、『秘史』の研究は、健全な發展とは無縁の、空論の袋

小路に迷いこむことになるかもしれない。

ここで問題にされる十五卷本についても、さきほどより述べているような研究上の盲點（より正確には、裏づけを缺いた「常識」の中にあると言つてよい。本論は、従來看過されていた十五卷本鈔本の一本に光をあて、私達が既に知っているその系統の本と比較検討することによって、同エディションの『秘史』に關して現在の段階で何が言えるのか、という課題に答えようとするものである。

一、十五卷本鈔本、とくにソ聯本について

『秘史』に、十二卷本と十五卷本の二つの系統があることはよく知られている。明代の洪武時期に刻本が作製されたが、散佚して今に僅か四一葉の断片を残すだけであり、大體において『秘史』は専ら書寫という手段によつて傳えられたと考えてよい。元來正集十卷續集二卷からなる十二卷本として著わされた『秘史』に十五卷本が生じたのは、永樂大典の編纂事業があつたことによる。この時、『秘史』が永樂大典中に収録されることになり、正續の別のない十五卷本への再編成が行なわれたのである。従つて、十二卷本・十五卷本とはいつても、内容に差異があるわけではないことは當然である。干戈の間にその殆んどを亡失してしまつた永樂大典諸本の、『秘史』は幸運な例外とはなりえなかつたので、永樂大典の裝いをもつ『秘史』を私達は見られない。しかし幸いなことには、永樂大典本『秘史』を書寫した十五卷本鈔本が今日まで傳わっている。これが『秘史』に十五卷本がある所以である。

『秘史』の傳來の事情を通覽すると、二つの大きな割期があるように思われる。理解を容易にするために、左に表を掲げる。この表は、今日私達が利用している漢字音譯本が成立して以來、『秘史』がどのように人々に認められてきたかを示したものである。即ち、『秘史』を架藏していた藏書家たちの序跋、藏書記の類、その書を見る事のできた學者の解題、さらには古書目に留められたその書のありようなどを時代順に集成列舉したものである。

元朝秘史研究略年表

書名(撰者)	刊年	巻数		解題	備考
		12	15		
文淵閣書目(明楊士奇等)	一四四一	(〇)	(〇)	無	「元朝秘史一部五册闕。元朝秘史一部五册闕。元朝秘史續集一部一册闕。元朝秘史一部一册闕」を登載。
棗竹堂書目(明葉盛)	一六三四	(〇)	(〇)	無	「元朝秘史五册。元朝秘史續集一册」を登載。
元朝典故編年攷(清孫承澤)	清初	〇	〇	有	
千頃堂書目(清黃虞稷)	清初	〇	〇	無	「元朝秘史十二卷」を登載。
元秘史略(清萬光泰)	一七四八	(〇)	(〇)	有	「秘史」のサマリ版。萬光泰の序を巻頭に、楊復吉の「元秘史畧跋」を巻末に附す。十二巻本による。
跋元秘史(清錢大昕)	一八〇〇			有	一八〇〇年とは錢氏の文集「潛研堂文集詩集」の刊年。跋に日附なきゆえ、假にこの年に従う。ソ聯本、陸氏本、葉德輝本等に收録。
元朝秘史跋(清顧廣圻)	一八〇五	〇	〇	有	四部叢刊本に收録。
愛日精廬藏書志(清張金吾)	一八二〇	〇	〇	有	「元秘史十五巻抄本」を登載。錢大昕の解題を全部收録。
四庫未收書目提要(清阮元)	一八三二	〇	〇	有	「元秘史十五巻」を登載。錢大昕の解題と並ぶ有名なもの。葉德輝本、四部叢刊本なども附載している。
元朝秘史(連筠蓀叢書)	一八四八	〇	〇	有	「秘史」の總譯の部分だけを抽出、集成したもの。錢大昕の解題を附す。
鐵琴銅劍樓藏書目錄(清瞿鏞)	一八五七	〇	〇	有	「元秘史十五巻鈔本」を登載。
帶經堂書目(清孫樹杓)	一八六六	〇	〇	有	「元秘史十五巻 張蓉鏡鈔本」を登載。*
邵亭知見傳本書目(清莫友芝)	一八七三	〇	〇	有	文淵閣書目の文を要約。また張金吾、阮元にそれぞれ「抄本」があることを指摘している。

碩宋樓藏書志(清陸心源)	一八八二	○	有	「元秘史十五卷 影寫元刻本 斄季言舊藏」を登載。「元刻本」というのは、もとの板本の意である。
八千卷樓書目(清丁立中)	一八九九	○	無	「元秘史十五卷 不著撰人名氏」を登載。立中は丁丙の子。左の『善本書室藏書志』に詳述されるものと同本である。
善本書室藏書志(清丁丙)	一九〇一	○	有	「元秘史十五卷 舊鈔本 蕭山王晚閣藏書」を登載。阮元の解題を殆どそのまま引用する。
元朝秘史(葉德輝本)	一九〇八	○	有	葉德輝の「元朝秘史序」、阮元の解題を卷頭に、無名氏と張穆および錢大昕の跋を卷末に附す。
郎園讀書志(清葉德輝)	一九一八	○	有	「元朝秘史十卷續十卷 舊鈔本」を登載。「續十卷」は「續二卷」の誤りである。
藏園羣書類記(傅增湘)	一九三三	○	有	「元朝秘史十卷續集二卷 舊寫本」を登載。
元朝秘史(四部叢刊三編)	一九三四	○	有	卷頭に顧廣圻、阮元の、卷末に張元濟の解題をそれぞれ附す。
江蘇省立國學圖書館圖書總目	一九四八	○	無	善本書室舊藏の十五卷鈔本を所藏。〈現存〉
北京圖書館善本書目	一九五九	○	無	「元朝秘史十卷續集二卷 清抄本 顧廣圻校並跋、周鑾詒傳增湘跋六冊。元朝秘史十五卷 清抄本二冊。元朝秘史十五卷 清抄本 翁同書跋四冊。元朝秘史十五卷 清抄本四冊」の四件を所藏。〈現存〉

- ① 本表は、洪業、陳垣、潘光旦などの研究をもとに、管見に入ったものをも加えて作成したものである。
- ② 備考欄には、書目の場合、原則として、登載されているアイテムを原文の儘掲げた。また、解題の類で、後年何度にもわたって用いられているもの(錢大昕、阮元のそれの如く)は、その度ごとに記載した。その時期、どのような解題が重視されていたかを窺うよすがともなれば、と考えたからである。
- ③ 藏書目録の類に『秘史』の登載があっても、大量に印行された板本(『元秘史略』、連筠移叢書版、葉德輝本など)である場合は一切省略してある。

* 張蓉鏡(字は美川)については、葉昌熾『藏書紀事詩』卷五に見える。

さて、『秘史』の傳來の事情を通覽すると、二つの大きな劃期があるように思われる。右の年表を参照してほしい。

先ず第一の劃期。それは『秘史』が、まだ鈔本の形でしか傳わっていなかった、謂わば「鈔本の時代」のことである。道光中の一八四八年、『靈石楊氏連筠篔簹叢書』中に碩儒張穆（一八〇五—四九年）が、十五卷本『秘史』の總譯の部分のみを抽出して作った『元朝秘史』を収録し、板行したことである。この出版によって、それまで一部の熱心な藏書家の探求書であるか、ごく僅かの學者から注目される存在にすぎなかった『秘史』が廣く江湖に普及しはじめたのである。特異な構造をもつ『秘史』の全貌が姿を現わしたというのでは決してないにせよ、そこに記載された内容のあらましが平易な形で紹介されたということの意義は大きい。『連筠篔簹叢書』の『元朝秘史』により、史料としての『秘史』のユニークさが解りやすい形で周知され、その次の段階として人々の興味は、當然のように斯様なハイライト版でない、漢字音譯されたモンゴル文テキストをきちんと備えた完全な『秘史』の探索研究に向かい始める。

かくして第二の劃期が訪れる。内藤湖南の請を容れた文廷式によってその鈔寫された一本がわが國にも將來された十二卷本鈔本をもとにして、十二卷本の板本「葉德輝本」が印行されるのである。これは今述べた『秘史』研究の氣運の高まりに對する謂わば最初のまとまった應答であり、成果であったと同時に、『秘史』についての眞のフィロロジカルな研究が行なえるようになる、という全く新しい局面の幕開きにもなったのである。そしてこの第二の劃期というべき「葉德輝本」の公刊とともに、「鈔本の時代」は事實上終りを告げる。

「葉德輝本」のあと、別の十二卷鈔本をもとに、この章の冒頭にもふれた新發見の洪武刻本の殘簡を織り込んで成った板本も、「四部叢刊三編」に収録されて印行されるに至る。⁽⁸⁾この二つの板本によって『秘史』のテキストの整備は進み、かくして今日の、十二卷本を主流とする『秘史』研究の路線が形成されたのである。

ここで注意すべきは、那珂の『成吉思汗實錄』が、「鈔本の時代」に屬する仕事であったということである。『秘史』についての様々な斷片的な言及、そしてその内容の大略、諸エディションの存在とその流れ、等々の情報は耳に入ってくる

るのに、全き『秘史』を見ることはかなわぬという「鈔本の時代」の最末期にふさわしい状況に悩まされたすえ、那珂は文廷式の鈔本の線をようやく摺んだのであって、量産されて目睹が容易になった板本を利用できたわけではない（因に『葉德輝本』が刊行されたのは、那珂の著作が世に出た翌年である）。内藤湖南を介して、文廷式提供の鈔本を見ることができた那珂の感激のほどは、だからこそ察するにあまりある。『成吉思汗實錄』の再版本には、註(1)で述べたように、文廷式を悼む文が巻頭に置かれているが、その行文からは故人より受けた厚い學恩への感謝の念が讀みとれるであろう。

『秘史』の（テキストの搜索とその發表をも含めた）研究史には、述べ来たった如く、二つの劃期が指定できようが、本稿では追究すべきテーマの關係上、永樂大典本の十五卷本鈔本が現われて以降どのように傳來して行つたかを、第二の劃期（即ち葉德輝による板本刊行）の頃までに限って見て行くことになるだろう。

さて、今日私達は『秘史』を参照する際、専ら十二卷本を利用するようになってきている。それは既に述べたように、主としてエディション流傳の問題に由來する。即ち、『葉德輝本』の出現以降、『秘史』のテキストに關する研究は、十二卷本の系統に沿って行なわれ、その結果曾ては何種類かの傳本の存在が確認されていた十五卷本の検討がなおざりになって行つたように思える。「葉德輝本」に加えて、のちに求めうる最良のテキストとして「四部叢刊本」が印行されてからも、なお十五卷本を検討し、十二卷本との校合を爲すべき事を力説していた先學もあるにはある。服部四郎は、言語學的な見地から、ヘーニツシュ(E. Haensch)が僅かに傳えていた「パラディウス本〔即ち本稿でいうソ聯本〕」の手懸りをもとに、「パラディウス本」が現存の他の諸本には見えない孤立的な特徴を持っているので「一般にこの本は誤寫が多くて決して良い本とはいへないが、孤立的の地位に立つ故に尊重さるべきもの」と認めている⁽⁹⁾。少しおかれて文獻學的な立場から十五卷本を参照すべきことを主張したのは、『秘史』の傳來についての研究で大きな貢獻をした洪業(William Hung)であった。彼自身は服部と同様、その時十五卷本を精査しうる立場にはなかつたのだが、後日果たさるべき課題として、二つの系統(十二卷本と十五卷本)の校定が必須であると主張している⁽¹⁰⁾。ところで私達は、服部や洪とはちがい恵まれた研究上

の環境に身を置いていたといえよう。その最たるあらわれは十五卷本鈔本の公刊である。それは、一九世紀にパラディイ（=パラディウス、*арх. Парадий: П. Я. Капаров. 1817—1878*）がロシアにもたらした一本である（以後「ソ聯本」とよぶ）。ここで話の順序として、ソ聯本のありようを簡単に紹介しておこう。⁽¹²⁾ 同本は六分冊よりなり、テキスト本體と錢大昕の跋文、黃丕烈（一七六三—一八二五年）による追記を含む。よく知られているように、この本は、鮑廷博（一七二八—一八一四年）の藏に係るといわれ、のちに浙江仁和の「韓氏藏書」に歸す。韓文綺（一七六三—一八四一年）と、その孫韓泰華の藏印が捺されている事からそれは判るのだが、一八七二年には轉じてパラディイがこの本を入手するに至るのである。なお、先にふれた「連筠蓀叢書」の『元朝秘史』にある張穆の記によると

右元朝秘史十五卷。道光二十一年八月、從永樂大典十二先元字韻中寫出。二十七年、復從仁和韓氏借得影鈔原本、校對無訛。

とあるが、陳垣は「ソ聯本」こそが張穆のいう「影鈔原本」であると斷じている（これには、なお考えるべき問題が存する。次章で詳述することになる）。この本の存在については古くから知られていたが、殊に一九三三年ペリオ（P. Pelliot. 1878—1945）⁽¹³⁾がその寫眞版を北平國立圖書館に贈ったのを、陳垣が書影と共に簡単に解説をしたことで、さらによく言及されるようになった。だが、私達が實際にそのテキストのすべてを餘すところなく目睹できるようになったのは、ソ聯邦科學アカデミーから寫眞版が刊行された一九六二年のことであった。つまり、現在通行している十二卷本系の諸エディションが出揃つてからもかなりの時間が経過し、そのテキストにそつた研究が進んでいる、という段階になつてから、全貌を現わしたというわけである。まさにそれゆえにこそ、この十五卷本が公刊されたことによつて、そのテキストが「頗るぞんざい」⁽¹⁴⁾で「十二卷本に比して内容的にはさほど優れたものではない」⁽¹⁵⁾ために、「十五卷本」の評価を低い點に決定的に固めてしまうことにもなつたのである。全く皮肉なことだが、これによつて『秘史』のフィロロジカルな研究はいよいよ十二卷本の一筋道を進むことになる。しかし、ソ聯本に對してのみ有効である筈のこのテキスト批判が、その一本に留まら

ず、いつの間にか十五卷本系全體への評價となつて「通説」化されているのは、なんとも奇異な現象と言わざるをえない。ただ、このような方法論上誤まつた通念が廣まり定着したのも無理もない、という一面もある。「このソヴェートの『元朝秘史』十五卷本は、『永樂大典』そのものが殆ど亡失し去つた今日、われわれが目睹しうる唯一の永樂大典本『元朝秘史』だといつてよい」とする(16)ような認識があつたので、ソ聯本が十五卷本を代表するものとして扱われるのも已むをえない、という風潮が生じたかのように見受けられるからだ。したがつて、服部四郎や洪業の、至つて當然とも思える後學への宿題も放置されたのであろう。

ところが、このソ聯本が参照可能の唯一の十五卷本である、という認識は間違つてゐる。私達が目睹しうる永樂大典本(十五卷本)は、他にもある。後に述べるように、今世紀初頭以降わが國に存在しながら、完全に看過されてきた十五卷本鈔本がそれである。(17) 次の章でその十五卷本について考えてみるつもりだが、ここで見逃してはならぬ背景がある。『秘史』の「鈔本の時代」について見るならば、先にあげた年表からも明らかなように、傳本の主流は十二卷本ではなく、十五卷本の方であつたように思われる。特に一八〇〇年代を通じての期間は、この傾向が著しい。清代の碩學たちがこの記念碑的なテキストの保存と傳承に果たした役割は、文學史上の偉大な物語の一つである、と正しくも評價したのはクリーブスであるが、その學者たちの殆んどは十五卷本を見ていたのであつた。斯様に比較的一般性のあつた十五卷本鈔本のうち、今に傳わる二本を此處で様々な角度から比較検討することにより、兩者のありようが近いものであるのか、或いは遠い關係にあるものなのかという問題について、また十五卷本がテキストとして、捨て去られてよいほど缺陷の多い本なのか等の問題について考えてみたい。換言するならば、今後さらに文獻學的な調査を、このエディションについて行なうに値するか否か、その見通しをつかむ爲の一助にしたいと思ふのである。

二、陸氏本の検討、およびソ聯本との對照

ここで問題となる十五卷本は、現在靜嘉堂文庫に所藏されている。本稿の冒頭に、一九〇七年という日附けを殊更に示したのは、その年が那珂の譯注書が出現した記念すべき年であるというばかりではなく、實はもう一つわが國の『秘史』研究にとつて重要な出來事があったからに他ならない。正にその年に、清末の大藏書家で浙江歸安の人陸心源〔道光一四（一八三四）—光緒二〇（一八九四）年〕の善本稀書を潤澤に含む一大コレクションが、擧げて岩崎家の有に歸したのだが、その内にこの鈔本も含まれていたのである（以後、舊藏者に因んでこの本を「陸氏本」とよぶ）。

同書は、乾坤兩冊（乾坤の別は小口書きにて示す）よりなる。大きさは二七・一×一七・八厘、精鈔本とは言い難いが、かなり几帳面に書寫された本である。まことに残念なことには、巻首の一葉（一葉とする理由は次に述べる。第一巻の第一二節、および第三節の正文を缺く）が無く、僅かに完善本たるを満たしていない。乾坤のそれぞれの内譯を詳しく見ると、乾（a）本篇の卷一—六・坤（a）本篇の續き、卷七—一五。（b）錢大昕による「元祕史跋」。（c）追記）の如くで、ソ聯本と収録する内容は同じである（陸氏本の脱落が一葉にとどまると判断したのは、兩本の編成が一致するという前提にもとづく。但し、ソ聯本は収録順序が、(b)―(a)―(c)となっている）。

靜嘉堂文庫としての同書の提要は、河田鵬編『靜嘉堂祕籍志』（靜嘉堂、一九一七年）に見えるが、實はその一文は陸心源の私藏本解題集『陌宋樓藏書志』（光緒八（一八八二）年。卷三三）を襲つたものにすぎない（なお、陸心源の解題は『陌宋樓藏書志』にあるのだが、『靜嘉堂文庫漢籍分類目錄』（同文庫、一九三〇年）に於いては同書は、「陌宋樓」藏書ではなく、「十萬卷樓」コレクションに屬すると表示されている）。そしてこの陸氏自身の提要にしたところで、その前半部分は阮元『四庫未收書目提要』（道光二（一八二二）年）の「元祕史十五卷」をやはり殆んどそのまま用いているのである（そして後半には、錢大昕の跋はめこんでいる）。

ところで、同書については、陸心源以前の所藏者が判っている。それは『陌宋樓藏書志』の同書の項に「勞季言舊藏」と記されていることによるのだが、全く別の面からもまたこの舊藏者を明らかにしうる。同書には、一見して判別できる

二種の筆蹟がある。(A)卷一—四、錢大昕の跋。(B)卷五—一五、追記)のだが、このうちの筆蹟(B)には缺畫が見られる。缺畫は、經(經、經とあらわされる)と原(原とされる。また源、癩などにも及び、「原」同様最後の一畫を缺く)の二字に係る。この二字は、勞格(季言は字)の父勞經原(字は笄士)の名を諱んだものに他ならない。缺畫は、ごく僅かの漏れを除き網羅的に行なわれている。陸氏本に二種の筆蹟が見えること、そしてその一方にだけ特定の缺畫が存するということ、この事實は様々の臆測を可能ならしめるようである。ともあれ、この缺畫措置から、陸氏本(の少くとも半分以上の部分—即ち筆蹟(B)—)が、まさしく勞格の時代に成ったものであり、それ以前には溯りえないことだけは明らかとなった。勞格の生年は、吳昌綬「唐樓勞氏三君傳」(『碑傳集補』卷五〇)によれば、嘉慶二五(一八一〇)—同治三(一八六四)年であるから、この鈔本は、その間のいつかに寫されたものということになる。なおまだ興味を惹かれる事實がある。經原の「好收書」(吳昌綬の文)という性癖によるものであろうか、彼の子の權と格は、「時人有二勞之目」(葉昌熾『藏書紀事詩』卷六)と稱され「累代富藏書」(同前)といわれるような大コレクターであった。勞格は浙江仁和塘樓鎮に居たのであるが、仁和とはソ聯本の確認しうる最古の持主、韓氏と同郷にあたるのである。

同書には附箋の貼りこみが散見される。最大のもので約一×七厘程度の小紙片で、一字を書き入れただけの極めて小さいもので、その形態は同一ではない。その内容は、テキスト中の特定の字の校定である(註に詳述するが、一例をあげれば「分了二字原本字將誤」の如し。ここに言う「原本」が何をさすのか、またそもそも誰の手によってこの附箋が作られたのかも、興味深い、しかしながら極めて解明の困難な問題である)。附箋の分布は偏在している。卷一に一〇、卷二に四、卷三に五、計一九箇處に限られており、他の卷には見られない。またこの鈔本には、傍譯の爲の傍線に朱墨を用いているが、附箋によって校定が行なわれる文字を明示確定するのにも、朱の印を該當の文字の横に附している。

また陸氏本には、卷數および各卷ごとの丁數表示が見られる。但し、全卷を通じて現われるというわけではない。卷五から一五までにのみ、この表示がある。換言するならば、筆蹟(B)の部分には、例外なくこの處置が施されている、という

ことになるのだ。

以上述べてきた缺畫處置、附箋の貼りこみ、卷・丁數表示は、陸氏本にのみ現われ、ソ聯本には見られないものである。さらに言うならば、陸氏本の内部に於いても、截然たる法則性の下に現われる。その區分をなすものは筆蹟である。左表は、陸氏本のもつ特徴がどの筆蹟の中に見られるかを示した一覽である。

筆蹟 (A)	筆蹟 (B)
I—IV、錢大昕跋。 * 附箋。	V—XV、追記。 * 缺畫、鈔寫データ(後述)、卷・丁數表示。

次に陸氏本とソ聯本の比較を行なってみよう。ところで、十五卷本がテキストとしては必ずしもすぐれたものでないことは、繰りかえし指摘されることである。この指摘はソ聯本の出來榮えに由來する。ソ聯本が影印出版された時、パンクラトフは「序文」にソ聯本の來歴を詳しく紹介しており閑然する所がない。そこでなされている評價は決して良くない。ソ聯本を仔細に點検すると、その鈔本の筆寫が非常にぞんざいであるというパンクラトフの評言が正しい事がよくわかる。テキスト中の字の無數の誤りは言うに及ばず(たとえば校勘本の序言には「十五卷本約有三千二百多字的錯訛」という)、一九四節(卷八)、二七二—二七三節(卷一四)には錯簡が見られるし、二三七節(卷一一)には脱漏までがある。

一方、陸氏本のテキストとしての完成度はどのようなものであろうか。以下、ソ聯本と對照することによって、陸氏本の良否を見定める作業の一環としたい。先ず第一の項目である。ソ聯本の幾つかの卷の末尾には、鈔寫データともいふべき記載があり、この本の來歴を明瞭に物語るものとして、古來注目を集めている。同様の記載は、陸氏本にもやはり見受けられる。しかし、兩者の現われ方には差異がある。次頁にその對照表を掲げる。

卷	ソ 聯 本	陸 氏 本
V	ナシ	嘉慶甲子十二月十一日從刻本補寫
VI	ナシ	嘉慶乙丑正月初三日從刻本補寫 七十八叟記
X	嘉慶乙丑元宵從刻本補寫 通介叟記 嘉慶乙丑二月十一日從刻本補寫 七十八叟識	嘉慶乙丑元宵從刻本補寫 通介叟記 (ソ聯本に同じ) ナシ

ソ聯本では鈔寫データは二卷分に記されているのだが、陸氏本に於いては三卷分に見ることができ、しかも孤立的に現われる分が二件ある。特に、第五卷にある「嘉慶甲子」(一八〇四年)という鈔寫時期の記載は、この部分にだけある貴重なものだ。なおこの記載は、古くは陳垣によって明らかにされたように、七十八叟と自稱した鮑廷博によってなされたものである。

第二の項目。ソ聯本には欄外上部に書きこみが見られる。卷八冒頭の「刻本第七卷起」から、卷十五末尾の「元朝祕史續集卷二終」まで、一一箇處に現われるこの書きこみは、十二卷本の卷の編成との對比を注記したものが五、記事の内容についてのコメントが六、というようになっていいる。この書きこみは陸氏本にも現われる。即ち、ソ聯本にある分はすべて陸氏本にも含まれているが、注目すべきは、陸氏本にのみ施されている書きこみがなお三件あることだ。左に列挙したのがそれである。

「刻本第四卷止。以下五卷。」(V, §117, 末尾)

「刻本五卷止。」(VI, §169, 末尾)

「刻本六卷起。」(VII, §170, 冒頭)

これらはいずれも、卷末にある黃丕烈の追記でいう所の「元刻本」を意味する。十二卷本、刻本との卷・節の對照が行なわれていたらしい痕跡が、卷四から既に存在することが明らかになった。

第三の項目として擧げるべきは、錯簡脱漏に関する問題である。十五卷本（より正確には、ソ聯本）の不評の大きい原因の一つは、先にも述べたとおり、錯簡脱漏があることだ。この本に幾つか存在する小さな脱落は、十二卷本系のエディションとの対比の上に明らかにすべき問題であるので、本稿では除外することにした。此處では、到底看過できない規模のものを採り上げるにとどめた。即ち、一九四節（卷八）、二七二—二七三節（卷一四）の二つの部分に錯簡が、また二三七（卷一）節には脱漏が見られる。この三つの大きな失点について陸氏本を検してみると、著しい相違点が一つ現われる。それは一九四節の錯簡部分である。陸氏本はこの箇處を、誤りなしに寫している。しかも注目すべきことがある。ソ聯本においては、錯簡は頁の途中より始まり途中で終わる（卷八、(a)二二b—二〇行目—一三b九行目が誤まって、(b)一三b—一〇行目—一四b九行目の前に紛れこんでいる）が、陸氏本ではソ聯本の錯簡に關わるそれぞれの部分がちやうど一葉分に相當する。陸氏本の卷八、第一三葉表裏が(a)、第一四葉表裏が(b)にあたるのである。即ち、少くともこの錯簡部分について言えば、陸氏は曾て正しいテキストを掲げていた、よりオリジナルに近い鈔本を寫し、ソ聯本は第一三と一四葉を綴じ誤まった鈔本から書寫したか、或いは、それを寫す時に頁あたりの行數を恣意的に動かしてしまつた鈔本に従つたものと考えてよからう。寫す時に行數をずらすということがソ聯本傳承過程のどの段階で行なわれたかは不明であるが、一葉分の錯簡を明解に説明しうる陸氏本が、誤綴と行の移動という二點においてソ聯本に先立つエディションである事だけは確認しうる。なお、殘された二つの缺點については、陸氏本も正しい形を傳えることができなかったことを、是非附言しなければならぬ。

この二つの本における行だては、頁あたり十行と共通している（但し、陸氏本にはごく僅か例外もある）が、行あたりの字數は一致してはいない。従つて、テキスト中の特定の箇處が、兩本では違ふ葉、行にある場合が普通である。この相違がなぜ生じたのかはよくわからないが、先に述べた一九四節の錯簡が陸氏本の頁だてによつて説明できたことから見ると、他の十五卷本が参照しうるようになった場合には、やはり重要な手懸りになるであろうことは豫測できる。

三、陸氏本とソ聯本の異同について

陸氏本とソ聯本との字句の對照をしてみると、その異同は一見して驚くべき量にのぼることがわかる。約二千九百箇處にも達する二本間の異同の對照一覽表は、紙幅の都合でここに掲げることが到底許されることではないので、稿を改めて發表する豫定である。⁽²⁴⁾ 本稿に於いては、特に重要と思われる異同、あるいは全體に係る問題點についてだけ概観しておく。

ところで、二本間の約二千九百という膨大な異同の數量の内には、異體字や俗字を含んでいない。この種の字の用法（特に使い分けがなされている場合）を點検することは、別の關心からすると見逃がしにはできない重要な問題ともなりうるであろうが、⁽²⁵⁾ 本稿ではテーマの方向と紙幅の都合とによって、原則として省略したのである。ここでは、兩本を比べるとソ聯本が俗字の類を多用する傾向にあるのに對し、陸氏本はその字については正字を用いることが多いという大まかな特徴だけを指摘しておく。たとえば、ソ聯本の用いる俗字の類、旁（窮）、劝（勸）、踪（蹤）、弃（棄）、爰（愛）、緞（糧）、門（闕）、壑（葬）、机（機）、赶（趕）、乘（乘）、惧（懼）、盖（蓋）、恠（怪）、突（突）、菱（美）、怀（懷）、勢（勢）、笑（算）、訊（讞）、迳（徑）などは、陸氏本では括弧内の正字で表記されている。また、著と着、突と突、蔑と蔑など、比較的よく現われる漢字においても使い分けが行なわれている場合が兩本ともにあるが、別掲對照表ではやはり除外した。ただ、附言すべきことが一つある。ソ聯本に於いては *converbium imperfecti* の suffix 周の傍譯には、殆んど「著」を用い、ごく少数「着」を用いる。これに對し、陸氏本では「着」は筆蹟(A)で頻繁に用いられ、(B)には「著」が優越的に現われる。それぞれの本に於いて、この兩者が同一の節で混用されている場合も少くない。そのようなケースにおいて陸氏本とソ聯本の間で、この二字の使い分けが完全に一致する節がいくつかある。少し例をあげておこう。一八七節(卷八)では著は一、着は主文の最後の行の「廢了着」の一件のみ、二二〇節(卷一〇)では著は一四、着は「不得着」として二回現われ

るだけ、また二六七節(卷一四)に於いては着が五、著が八と、前二例の極端に多いものと例外的なもの、という配分とは異なるパターンを示している。着と著の、全く意味のない使い分けが一致する節が僅かながらも存するということには、どのような意味があるのだろうか。この、使い分けの一致は、二千九百にも達する多くの異同を持ちながら、兩本が同じ本に溯及しうるということを示す痕跡といえるであらう。そしてそれはまた、鈔寫に際して安易に著あるいは着への統一をせず、テキスト上の、使い分けをその儘忠實に寫すことを意識的に行なつたプロセスがあつたことを物語っている。但し、このような、使い分け、あるいは忠實な鈔寫が、何らか明確な原則の下に行なわれていたということは甚だ疑わしい。何度も鈔寫が重ねられた間には、忠實度の高い筆寫もあつただろうが、當然不注意による誤寫や賢ましらによる字句の改變も多く生じたことだろう。陸氏本とソ聯本の間にある大量の異同は、このような背景を念頭に置いて考えれば説明がつかない。文獻學的に十五卷本系統の傳來を調査するには、正文(即ち蒙文漢字音譯の用字)だけではなく、傍譯や總譯に於ける漢字の使われ方を比較検討することも有力な方法となりうるだろう。ここに例をあげた、著と着の使い分けの對比は、その可能性の一つであるが、検討の爲の材料が二本では、残念ながらこれ以上のまとまつた整理はできそうにもない。

別稿に發表する豫定の異同の對照一覽表を通覽してみると、明らかな特徴がある。異同の件數は、卷によって偏りがあり、卷一―五に特に多く、それぞれ三百件を越える。即ち、異同の總件數の六割が、卷一―五の部分に集中しているのだ。そして各卷の異同件數は、それぞれの卷の葉數の多少とは無關係である。この、卷一―五における異同件數の突出は、少くとも陸氏本に話を限るならば、やはり筆蹟の相違によって説明できそうである。ただ、卷五は卷一―四とは別の筆蹟に屬するもので、この推斷を決定的なものにするのを阻害していることも記しておくべきであらう。

以上見てきたように、陸氏本とソ聯本との關係は、まことに矛盾に満ちたものである。兩本は、書誌的には幾つもの共通する外面的な表徴を備えている。先ず収録された構成要素が等しいということ。即ち、清代において『秘史』に關心を

もつほどの人々には比較的よく知られていた錢大昕の跋を共に載せ、黃丕烈が鮑廷博にあてて記した追記をもふたつながら含んでいる。またこの二本が據った鈔本の幾つかの巻の末尾に、鮑廷博が附した鈔寫データもやはり共に見られること。テキスト中の同一字の二つの字體の、それ自體なんの意味もない使い分け（従って、偶然の産物とすることは困難な現象である）が、完全に一致する節がいくつもあるということ。この二つの本がどちらも、曾て文化の淵藪と稱された浙江の仁和县に、まさに同時期に併存していたこと。これらすべての條件は、積極的あるいは消極的に、陸氏本とソ聯本とが近い關係にある可能性を示唆している。けれども、別稿異同對照表で看取できるように、兩本のテキストの相違はあまりにも大きい。正文、傍譯、總譯の別を問わず現われる、二千九百の歴大な異同は、兩本の親縁性を示すいくつかの有力な要素にもかかわらず、二つの本のありように決定的なちがいが嚴存することを強く印象づける。

またこの二本には、それぞれ固有の問題點が内包されているように思われる。陸氏本については、やはり筆蹟(A)と(B)の顯著な性格のちがいである。一つの本を構成しあいながら、木に竹をついだように互いにそぐわないありかたを示すこの二つの部分は、ひょっとすると全く別物だった(A)と(B)を合成したものが陸氏本になったのではないか、というあまり現實的でない推測までも思い浮かべそうなほどである。ソ聯本についても大きな問題がある。先にも述べたが、「連筠篔叢書」の總譯集成本『元朝秘史』は、「韓氏藏書」本、即ちソ聯本と思われるもの、に據っているとされている。敢えて「思われるもの」などと、含みのある言い方をしたのは意味がある。「連筠篔叢書」本と、ソ聯本の總譯部分には少なからぬ異同があるからである。「連筠篔叢書」本のテキストは、少くともソ聯本の總譯を忠實に寫したものである。すると「連筠篔叢書」本は、ソ聯本に據るよりは寧ろ「道光二十一年八月、從永樂大典十二先元字韻中寫出」と張穆が跋に記している、そのテキストの姿をそのまま反映しているのかもしれない。この推測には根據がある。「連筠篔叢書」本とソ聯本の總譯部分の異同のうちで、陸氏本とソ聯本の總譯部分中の相違部分と重複するケースを検討してみると、意外な事實が明らかになる。ソ聯本では異なる漢字で寫されたその箇處が、陸氏本に於いては「連筠篔叢書」本の用字と一致して

いるという状況が支配的なのだ。つまり、陸氏本と、張穆が道光二十一年八月に寫した十五卷本とは、少くとも此處で問題になった總譯の特定の用字については同じ様相を呈するのである。ありうべき別の解釋として、ソ聯本は張穆の見た本ではなく、張穆が跋で道光二十七年によつたと言ひ韓氏の藏書の副本だったというケースもあげられる。當然のことだが、これはあくまでも可能性の問題であり揣摩臆測に屬する。

ともあれ、互いに近いように思える陸氏本とソ聯本のテキストにおける乖離は、直ちに十五卷本の流傳がかなり廣汎に行なわれていたのかもしれないという推測を私達に抱かせるだろう。錢大昕が寫したもとの鈔本から、別途の系統で鈔寫を繰り返しているうちに、もとのテキストから大きく離れてしまった本、もとの姿を比較的忠實に保ち續けることができたもの、というようなバラツキが生まれたと考えてよいのではないか。この見通しが大きな誤りを犯していないとするなら、此處で行なつたような十五卷本鈔本の検討對比をさらに進めなければならぬ。別稿で對照表を作りながら校定をのちの問題としたのは、本稿の目的にもよるが、別本を參照したうえでの校定の方が實りのある作業だという判断もあつてのことである。別本が無いなら已むをえないが、略年表の末尾に示したように、存在が確認できる本がいくつか中國に遺されているのである。その意味では、註(3)に於ても少しふれたが、前述の『蒙古祕史校勘本』が地の利を得ながら、參照可能な異本を材料として用いなかつたことには、失望せざるをえない。『祕史』のような、漢字が表音の機能だけを利用してある部分が重要な意味をもつ(ということとは、書寫時に誤り易い性格をもつ)という文獻に於いては、手の届く別本にはすべて眼を通し、現存するテキストから最良のテキストを作り出す事が不可缺である。アイデアルなテキストというものは、まさに斯様な愚直な本當の意味での校勘ののちに、その成果をもとにして作成されるべきものであろう。

本稿で明らかになつたように、大きなバラツキをもちつつ傳來されてきたと思われる十五卷鈔本の、別本の意義は格別大きい。それでは最後に、現在中國に遺されている十五卷本鈔本を瞥見しよう。略年表の末尾を參照すると、四種の鈔本があげられる。先ず、舊江蘇省立國學圖書館にあるもの。これは浙江錢塘の大藏書家丁丙(道光二二(一八三三)——光緒二

五(一八九九)年の「善本書室」舊藏本で、その前は蕭山王晩閣の藏に係る三冊本である。また北京圖書館には、三本が架藏されている。二種の四冊本中、一冊には道光の進士で同治三(一八六四)年に陣歿した江蘇常熟の人翁同書の跋(日附けはない)が載せられ、その文中には「世間傳本絕稀。余從廣陵藏書家購此精鈔本。」という一節があり、該本の來歴を傳えてくれる。それらの本の目録が、將來かなうことを望みつつ本稿を結びたい。

本稿は昭和五十五年度科學研究費獎勵研究(A)「元朝秘史諸鈔本の文獻學的比較研究」の研究成果の一部である。

註

(1) つまり、初版(A)、(B) (A)(B)は分類の便宜の爲の假稱、そして

再版の三種が發行されたのである。各版の内容は左の通り。

初版(A) (a)タイトル頁・(b)「成吉思汗實錄の序論」・(c)「成

吉思汗實錄の目録」・(d)本文。

初版(B) (a)・(b)「蕭親王の「寄上」文」・(b)・(a)・(c)・(d)。(初

版は(A)(B)ともに、明治四〇年一月一八日發行)

再版 (a)・(b)那珂の「祭萍鄉文廷式文」と題する追悼文・(c)

・(b)・(d)。(明治四〇年四月一八日發行)

このように、明治四〇年に刊行された『成吉思汗實錄』には再版まで出ていたのである。しかし世上にはもう一つ「再版」が存在する。昭和一八年九月二〇日に筑摩書房から、二千部の限定として發行された『成吉思汗實錄』がそれである。いわば原本のリプリントとも思われそうなこの本は、まともなリプリントたる事にも失敗している。オリジナルの影印という妥當な方法をとらず、行組みを変えたので原本と頁数がズレることに

なったのだ。このように、昭和の「再版」は、同書の引用・参照に無用の混乱をもたらしただけでなく、書誌的にも現に存在

する再版を無視するという何重もの大きな缺陷を含んだものとなっている。しかもこの「再版」では、冒頭の「成吉思汗實錄の序」(有高嶽)にも、巻末の「後記」(筑摩書房編輯部)にも、この間の事情は全く説明されない。従って、文廷式から内藤湖南を経て那珂の手に入った『秘史』の來歴、『成吉思汗實錄』成立の事情などを知る爲の重要な資料である再版所收の

「祭萍鄉文廷式文」は、たまたま再版を利用した人しか見ることができない、という困った状態の下に置かれている(この小さな事實については、「成吉思汗實錄劄記」として、日本モンゴル學會(早稻田大學、一九七九年六月一六日)で口頭發表した)。

(2) 村上正二譯注『モンゴル秘史―チンギス・カン物語―』書評。『東洋史研究』第三五卷第四號、昭和五二年三月三十一日發

行。

- (3) 拙編『元朝秘史關係文獻目録』（日本モンゴル學會、一九七八年二月五日發行）を参照のこと。なお近時の研究動向の大きな出来事は、『文革』によって閉塞されていた中華人民共和國における『秘史』研究が爆發的な勢いで公けにされたことである。但し、本稿が問題にしているようなテーマ、中國でしかできない数々のエディションを見わたして検討するということうな、曾て洪業が後學に託した類の文獻學的研究は、今のところ全く見られない。「校勘本」と銘打った最新刊、額爾登泰、烏雲達賚校勘『蒙古秘史校勘本』（内蒙古人民出版社、一九八〇年九月第一版發行）を参照してみても、千頁を優に超える鉅冊であるにも拘わらず、このような興味は殆んど満足させてはくれない。中國國內に於いて、今に傳わった『秘史』鈔本の紹介が行なわれることを望むものである。また、長らく刊行の待たれていたクリープスの研究成果が發表され始めたことにも注目し値する。現在英譯のみ出ているが、後續が豫告されているもの一冊、コメンタリーの巻が待たれる。

* F. W. Cleaves, *The Secret History of the Mongols, For the first time done into English out of the original tongue and provided with an exegetical commentary, Vol. I (Translation)*, Harvard Univ. Pr., Cambridge & London, 1982.

(4) W. Hung, *The Transmission of the Book known as the Secret History of the Mongols*, *H. J. A. S.*, 14, 1951.

(5) Cleaves, *op. cit.*, pp. xvii—lxv.

(6) 現在は臺北の國立中央圖書館所藏。國立中央圖書館編印『臺灣公藏善本書目書名索引』(中華民國六〇年六月初版)に、『元朝秘史 十五卷 元不著撰人 明洪武刊本 存四卷』(一七二頁)と掲載されているのがそれである。四部叢刊の、それぞれ所定の部分に挿入されているので、容易に参照しうる。

(7) 臺北、廣文書局。「史料叢編」の一冊として影印版が刊行。

(8) 上海商務印書館、一九三六年刊。

(9) MANGHOL UN NIUCA TOLBСАН (*Yuan-Chiao p'ishi*), *Die Geheime Geschichte der Mongolen, aus der chinesischen Transkription (ausgabe Ye Teh-hui) im mongolischen Wortlaut wiederhergestellt von Erich Haenisch*, Franz Steiner, Wiesbaden, 1962. (Nachdruck der 1937 im Verlag Otto Harrassowitz). 服部四郎『元朝秘史の蒙古語を基は漢字の研究』龍文書局、昭和二十一年九月五日發行、一七頁。

(10) Hung, *op. cit.*, p. 444.

(11) *Kuan'-chao pu-shi (Секретная история Монголов), 15 изюаней, Том I, Текст, Издание текста и предисловие В. И. Панкратова, Памятники литературы народов востока, Тексты, Большая серия, VIII, Академия Наук СССР, Институт Народов Азии, Издательство восточной литературы, Москва, 1962.*

(12) *Там же, Панкратов, Предисловие.*

(13) 陳垣『元秘史譯音用字攷』中央研究院歷史語言研究所、北平、一九三四年二月發行。

- (14) *Kanb-cao bu-shu*, Пакрапов, Предисловие, стр. 16.
 (15) 村上正三『譯注『モンゴル秘史』チンギス・カン物語』(3)『平
 凡社(東洋文庫二九四)、昭和五年八月二〇日發行。「解説」
 四〇三頁。
 (16) 同前、四〇一頁。
 (17) 陸氏本の閲覽、寫眞復寫を快く許された靜嘉堂文庫に謝意を
 表すものである。また、この寫眞の存在を最初に指摘された森
 田憲司氏に謝意を表す。
 わが國に將來されたあとの陸氏本についての言及は、洪業の
 研究の注記に僅かに觸れられているもの以外にはない(Hung,
op. cit., p. 444, note 26.)。最近刊のクリブスによる英譯本
 の「序言」におけるエディンブンの系統解説でも“*Yung-lo*
ta-tien text of the Yuan-chao pi-shih in 15 chuan”として
 四種の本が列擧されているが、何故か陸氏本は現われない。ソ
 聯本の寫眞複製本が「北平國立圖書館」に藏される事を述べる
 ほど緻密なこの序言が陸氏本を逸しているのは、まことに不思議
 なことだ(Cleaves, *op. cit.*, pp. 1x1-1x11)。
 (18) Cleaves, *op. cit.*, pp. xxxii-xxxxiii.
 (19) 陸氏本の二種の筆蹟の分布から想像すると、同本は、ソ聯本
 と同様な(b)↓(a)↓(c)なる配列の本をその順に寫し、綴じる時に
 便宜的に本篇を前に出し、跋と追記を末尾にまとめた、という
 事情があったのかもしれない。
 序でながら、ソ聯本の筆蹟は終始變わらず、陸氏本(特に筆
 蹟(B))が些かつたなさを感じさせるのに對し、比較的洗練され
 た手蹟のように見受けられる。

- (20) 附箋によつて加えられた注記は左の通りである。(表示の順
 序。卷・節・正文〔主と略す〕、傍譯〔傍〕、總譯〔總〕の別。
 注記を加えられる箇所〔確定できるものについては、その字に
 傍點を附した〕。附箋中の記述〔。は朱で附されたもの〕
 ①—§7 總 頭□了 空格内、原本着字。將是看字。
 ②—§15 總 蔑兒干門他 本間他閑字、將問字。
 ③—§19 總 良前列生着每人與一隻箭幹 根前根字、將從足旁
 前列生着生字、將坐字/箭幹二字、將幹字。
 ④—§21 總 光恰似黃狗 恰似黃狗殺恰字、原本作合。將誤。
 你問
 ⑤—§22 傍 阿塔刺 你問你字、現注内。將是任字。
 分。
 ⑥—§23 傍 忽必 分了二字、原本子字。將誤。
 ⑦—§24 總 [テキストのどの字さすか不明] 原本乾字、恐
 是乾字。
 ⑧—§46 總 那牙勒姓 牙勒二字、原本作勤。乞詳。
 ⑨—§46 總 婦人又生二子 婦人又生二子、原本人生二子。將
 非是。
 ⑩—§53 總 今日□這兒子 將。
 ⑪—§70 總 莎哈台□祀 祭。
 ⑫—§78 總 又如咬□羔兒 自。
 ⑬—§79 總 名□的山 子。
 ⑭—§88 總 桑□兒河 古。
 ⑮—§103 總 一般祭祀 末一空格、將是祭字。原本作祭字、筆

誤也。〔コメントするような空格はなく「祭」字が入っているが、後筆と思われる。同部分にある別の「祭」字と異なるからである。祭字は筆蹟(B)に見えなくもない。〕

⑩ 冊の10の主 〔二つ目の〕脱幹鄰勒罕 空格内、原本鄰字、上文作鄰字。未知孰字。乞補之。^中

⑪ 冊の10の主 〔三つ目の〕脱幹鄰勒罕 此文作鄰字。^{人名}

⑫ 冊の10の主 帖木眞 帖木眞(この三字不明瞭)前頁屢見、原本無人字。

⑬ 冊の10の主 一箇銅罐的 銅罐二字、上文旁註從缶旁。此從ノ旁、實誤。

〔陸氏本にもソ聯本にも、灌という漢字は見えないが、「連筠篔簹書」本のこの部分には「一箇銅灌的」と現われる。この附箋に註した人は、灌の用字を「連筠篔簹書」本に於いて見ていたのだろうか。〕

(21) *Kara-yao Gu-wu, Tankparov, Iperedichovsk.*

(22) 『蒙古秘史』校勘本序言『蒙古秘史校勘本』四頁。

(23) 陳垣、前掲書。「俄本來歴」として、明快に述べられている。

(24) 『四天王寺國際佛教大學文學部紀要』第一六號に掲載豫定(昭和五九年三月刊行豫定)。

(25) たとえば、陳垣や服部による著名な研究(いずれも前掲)。また、同一字を複数の別體字を使い分けて表記している場合などは、他の本に於ける使い分けと對照すれば、傳來の關係を考察するのに有力な材料となりえよう。

(26) 今日の南京圖書館にあたる。王學熙「南京圖書館」、『中國歷史學年鑑(一九八一年版)』(人民出版社、一九八一年九月發行)の博物館、圖書館、檔案館簡介、四七二頁。

(27) 北京圖書館藏の諸鈔本の現存の確認と、翁同書の跋については、木田知生氏の教示による。附記して謝意を表するものである。

Thus, insufficient geographical knowledge does not completely explain why there remained areas undelineated by national boundaries. As written documents indicate, the fact that the Russian representatives had not received instructions regarding the borders in this region, must also be understood as an important factor.

THE 15-JUAN MANUSCRIPT VERSIONS OF THE *YUANCHAO MISHI* 元朝秘史

HARAYAMA Akira

This essay is a study of the 15-juan manuscript version of the *Yuan-chao mishi*. When the 15-juan text was recorded in the Yongle dadian 永樂大典, it was reedited from a 12-juan text. Today, several manuscript versions of the text have been transmitted. In 1962, an old manuscript of the text was published in facsimile by Palladii in the Soviet Union. By this publication we can easily consult the 15-juan manuscript versions. Concerning the Palladii text, we cannot say that it is authentic. And it seems that the 15-juan manuscript versions as a whole are vaguely regarded as unreliable.

For this essay, I examined the manuscript version formerly in the collection of Lu Xinyuan 陸心源, now kept in the Seikado Library 靜嘉堂文庫. When this text is compared with the Palladii text, the following discrepancies become apparent: there are differences in about 3000 places; the obvious mistakes in the Palladii text do not occur in the Seikado text. Considered from the point of view of the transmission of the printed texts, the large differences between these two versions in extremely close juxtaposition suggest that the manuscript versions of the 15-juan text have many variants.

This necessitates a comparative examination of the other surviving versions of the 15-juan manuscript text. A revised text which can be compiled from the various versions of the 15-juan text must then be compared with a revised text made from the various 12-juan texts. By this work, the superior text of the *Secret History* 秘史 will have been determined.